



滋賀大学長 竹村 彰通

Profile

1952年生まれ。1976年東京大学経済学部卒業、1978年東京大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史学専門課程修士課程修了。米国スタンフォード大学統計学部客員助教授、米国バーデュー大学統計学部客員助教授、東京大学経済学部教授、東京大学大学院情報理工学系研究科教授を経て、2015年5月滋賀大学に着任。2017年4月から滋賀大学データサイエンス学部長、2022年4月から現職。

彦根キャンパス総合研究棟(土魂商才館)にて

学長メッセージ

デジタルの時代へ

デジタル環境を活かした教育の推進をめざして

滋賀大学は昨年「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」への応募で、優れた取り組みとしてリテラシーレベル+(プラス)の認定を受けました。さらに、今年の8月には同プログラムの応用基礎レベルに選定され、特にデータサイエンス学部は実践的な取り組みを高く評価され応用基礎レベル+(プラス)に認定されました。滋賀大学は2017年に日本で初めてデータサイエンス学部を開設しましたが、これらの認定では全学的かつ先導的な数理・データサイエンス・AI教育が評価されました。数理・データサイエンス・AIの素養はデジタルの時代で必要とされるものです。「デジタル敗戦」という言葉で表されるように、日本はデジタル化で出遅れている状況があり大学教育でも対応が求められています。

デジタル化の一つの大きなきっかけとなったのは2年半前の冬に突然始まった新型コロナウイルスの感染拡大です。感染拡大当初は新型コロナウイルスについて多くの情報が得られておらず、大学としても非常に慎重な対応をせざるを得ない状況となり、キャンパスへの立ち入りも制限されました。その中でデジタル技術を活かしたオンライン授業を活用することにより、教育を継続することができました。その後、感染の急拡大とそれに対応する緊急事態宣言

などの感染対策が交互におこなわれ、感染の拡大と縮小の波が繰り返され、今年のはじめは第6波という状況でした。春学期が始まる頃には第6波が一定の落ち着きを見せていたため、この春学期の授業は基本的に対面でおこなわれ、キャンパスはコロナ前と同様に学生たちで賑わいました。今後も感染の波が繰り返すと思われるが、基本的な感染対策をおこないつつ、本来のキャンパスでの生活を大事にしたいと思っています。一方で、オンライン授業にも、資料が見やすいなどの利点もあります。今後も滋賀大学ではデジタル技術の利点を活かした教育を進めていきます。

次に、この2月に突然始まったロシアによるウクライナ侵攻ですが、紛争は長期化の様相を示しています。ウクライナに対する継続的な支援が求められています。滋賀大学でもさまざま支援活動をしてきましたが、この7月には2名のウクライナの学生が留学生として滋賀大学に到着しました。オンラインでのプロジェクトがきっかけとなり滋賀大学への留学につながりました。コロナ禍の中で外国との行き来が制限される中、遠いウクライナから滋賀大学に来ることのできた学生達ですので、キャンパスでの出合いを大切にしていきたいと思っています。